

(1) 房総の玄関口西上総

上総国と呼ばれた房総半島の中西部は、海山の幸にも恵まれ、米の生産力も高かった地域です。弥生時代後期（約 2000 年前）の稲作は、小さな区画の水田で行われていましたが、古墳時代中期（約 1500 年前）以降、鉄製農工具の普及とともに開墾が進み、現在の穀倉地帯（養老川、小櫃川、小糸川流域）の原風景ができていきました。その背景に「古東海道」などを通じて、近畿・東海地方から人や先進技術が入ったことが大きく関係していました。



「古東海道」のルート



弥生時代の水田跡（木更津市芝野遺跡）
〔写真提供：(財)千葉県教育振興財団〕



牛耕の様子（昭和初期）

(2) 地図は語る谷津田・里山・里海

西上総の各地に残されていた谷津田・里山の風景は、弥生時代以降の農耕の歴史の中でつくられてきたものですが、最近では、その多くが市街地などに変わっています。しかし、新旧の地図を比較することで、かつての谷津田や里山の風景が再現できます。新しい地図では宅地などとなっても、「〇〇谷」のような地名が残っており、同じ場所を古い地図で見れば、そこが谷津田であったことが確認できます。



1962年地形図 木更津

また、古い地図の海岸線に目を向ければ、干潟の存在や浜ぞいの集落の形成が見て取れます。新旧の地図を見ながら現地を



干潟での潮干狩り風景（大正時代）

訪ね、地元の方から昔の話を聞くことができれば、さらに細かく昔の様子が再現できるでしょう。

身近な地名や古い地図を手がかりに、わたしたちの住んでいる場所の風景や、生活がどのように変化したのかについて考えることができます。そこには現在の環境や防災など、様々な問題を解決するヒントが隠されています。



2005年地形図 木更津